

「行政」から「管理部門」へ

——司書と事務職の相互理解を進めるために

薬袋秀樹

職業柄、研修のための打ち合わせやその後の懇談の際に、多くの公立図書館の職員の皆さんと話す機会がある。その際、時々、司書と事務職の関係が円滑でないことを耳にする場合がある。双方の話を聞いてみると、ほとんどの場合、お互いの間に誤解や認識不足、説明不足があり、それほど意見の相違があるわけではないように思える。

誤解や認識不足、説明不足の一つの原因となっているのが司書特有の言葉づかいである。司書の人々が頻繁に使う用語に「行政」「行政側」という言葉がある。これは「行政は図書館のことをわかってくれない」「行政側は司書の役割を理解してくれない」という形で用いられることが多い。この場合の「行政」とは、首長部局の企画、財政、総務、人事等の担当者や担当部局、および教育委員会の庶務、人事等の担当者や担当部局を指すものと思われる。この場合の「行政」は、司書から見た「本

庁」や「庁舎」の事務部門の中核を指す用語であり、司書が担当している「サービス」と対比して用いられている。司書の側では特に意識せずに用いられていると思われる。

ところが、改めて考えてみると、この用語は大変問題のある用語である。なぜなら、この用語を用いると、図書館や図書館の司書は行政には含まれないことになり、行政の外にいる何か別な存在になるからである。実際、10年以上前のことであるが、ある地方自治体の管理部門の職員は「1年ほど前に、私は、多くの図書館職員と話し合う機会を得た。その際に、図書館職員が話す『行政は』とか『行政側は』という言葉に、自分たちを行政とは別の立場に置いているという意識を読み取り、奇異な感じを抱いた」¹⁾と述べている。

しかし、司書の人々も、事務職と同様、自分たちを行政の一部と考えていることは間違いない。問題は言葉づかいである。適切な用語がない

ために「行政」を用い、その結果、誤解を受けてきたのである。では、その代わりにどのような用語を用いるべきだろうか。

筆者は昨年3月にある文章²⁾を発表したが、その際、この点に悩み、何人かの自治体職員の方に相談してみた。「行政」という用語に対する反応は上記の意見と同様で事務職にはきわめて評判が悪かった。この用語は事務職にとっては「許せない表現」のようである。結局、ある県の事務職の方から「管理部門」がよいと教えていただいた。それ以後「管理部門」という用語を用いている。

ささいなことと思われるかもしれないが、これは、司書が事務職の信頼を得る上できわめて重要な問題である。「行政」という用語を使ってきたおかげで、司書はずいぶん損をしたのではないだろうか。

読者の皆さんはどうお考えでしょうか。

注

1) 武田昌弘「職業倫理や社会的役割が明確に」『図書館雑誌』77(7), 1983.7, p.429

2) 薬袋秀樹「読書案内サービスはなぜ必要か」『現代の図書館』34(1), 1996.3, p.32-39. 参照はp.35

(みない ひでき: 図書館情報大学)
[NDC9:013.1 BSH:図書館員]